

親しい死

遠藤芳子

父が亡くなって三ヶ月、独り暮らしをしていた母が、昆布、塩鮭、かんぴょうま
で持参して年の暮れにやって来た。雪国の故郷では、暮れになると必ず昆布巻きを
作る。塩鮭を昆布で巻き、干瓢で結ぶ。丁寧に昆布を拭いたり、切ったり、形を揃
えて巻いたり、と根気がいる。当時我が家の息子は食べ盛りであった。母は張りきつ
て。二十九、三十日と二日間かけて大鍋いっぱい昆布巻を作り、三十一日にもう
一度火を通して大晦日の食卓を飾った。

大晦日といえば故郷では、昆布巻きほかに、八つ頭、人参、蒟蒻、牛蒡、車麩
等々の煮物と別にぜんまい、身欠き鯉の煮物を作るのが慣わしだった。年末になる
と足付き、漆塗りのお膳を出して磨いておく。食器も特別なものを出して磨いたり
洗ったりしておく。大晦日にはつやつや光るお膳に、特別な食器が置かれ、各種煮
物のほかに、煮臈（一度煮てから冷やす）、きんぴら牛蒡、数の子と昆布、白菜、人参、
蕪などの野菜と麴を合わせた漬物、焼き魚（鮭）が並ぶ。「大晦日は忙しく、お蕎
麦をツルツルッと」と言う都会の人の話を聞くと、子ども心に何処の国の話か、
何が忙しいのか不思議だった。

雪国の暮らしは、雪に閉じ込められる期間が長く、単調である。そのため、ハレ
の日とケの日の区別をことさら大仰にしていたのではなかったかと、後に思い至っ
たのであるが。大晦日、お正月の素材は勿論、雑煮の野菜の切り方までも祖父母は
母に厳しかった。

春になると、猫柳がふくらみ、小川の水嵩が増す。芹が、勢いをつけて流れる水
に根を泳がせる。梅、桃、桜、椿、辛夷、谷ウツギ、菜の花からカタクリ、シヨウ
ジョウバカマ、タンポポ、落の臺まで一斉に花開き、山里の村落は一挙に賑やかに
なる。春を待ちかねる母は、「雪国の冬の厳しさは、暮らした者でないと分からない」

とよく口にしていた。

鹿児島生まれの鹿児島育ち、天文館通りの呉服屋の一人娘だった母が紆余曲折を経て、東京で看護婦（師）として働いた後、仲立ちをしてくれる人がいて新潟県人の父と結婚。二人の子どもを連れてどんな覚悟で雪国の暮らしに入っていたのか。厳しい祖父母のもとへ、屋根の雪降ろし一つ出来ない嫁が来たと集落ではちよつとした話題であつたらしい。

祖父は土建業を営み、山一つ超えて往来するしかなかった隣の集落との間にトンネルを掘ったり、はては青島へ出かけたり、大勢の人夫を使い、結構山師であつたようだ。お金が入ると温泉街へ繰り出し、何人もの芸者を家へ連れてきたと聞いた。集落の名をつけた小町と呼ばれた美人の祖母が、どのような気持ちで迎えたのかは想像するしかないが、明治の女であつたから、^レ忍^レの一字に縛られていたのかもしれない。浮き沈みの激しい祖父との生活を、家の前部分に細々とした雑貨を並べることと補っていたと聞いたことはある。

晩年の祖父は、「天（あま）の山」と名づけた里山に緩やかな石造りの階段を作つた。大きさを揃えた石一つずつを河原からリヤカーで運び、山へは背負つて運んだという。要所、要所に集落を見渡せるお休み所を作り、ベンチを置き、頂上には三十人は入れる社を作つた。石段の周囲に季節ごとの花を植え、村人みんなの憩いの場所として提供。この作業は一銭にもならないからと独りでやり通したそうである。枝垂桜、藤、萩の季節は特に見事で、近隣誘い合わせて、お弁当持参で出かけていく。その里山の見晴らしの良い場所の一つで、祖父が介錯無しの割腹自死を遂げたのは、復活した年一度の村中総出の夏祭りの翌日、昭和二十一年八月十八日（終戦の翌年）のことであつた。戦死を免れて帰国していた息子たちも都会から祭りに帰郷し、再び自分たちの生活へ旅立つた直後のことである。祭りの間に、密かな別れを胸のうちで呟いていたのだったか。祖母は間もなく中風で倒れ、嫁（私の母）に六年間介護され天に還つていった。

母は、連れ合い（父）の一周忌を済ませた半年後、体調を崩したと雪国病院へ検査入院をした。慌てて帰郷した子どもたちには、「疲れが出ただけ」と言いながらも医師には症状のあれこれを述べ、「癌に違いない、どう考えても癌の症状です」と言っていたらしい。医師は、母が連れ合い（父）を悪性腫瘍で失つて間もないこ

とから推察したのだろうか。診断名は「癌ノイローゼ」。精神安定剤を処方され、後日見た折には部屋の隅にほとんど手付かずのままの薬袋が積まれていた。医師があてに出来ないなら民間療法にも頼っていたらしい。五人の子どもはみな都会暮らし。それぞれ自分たちの生活が忙しく、誰も親身にならなかったと臍を嘔む。後日思えば、父が亡くなる頃にはもう癌に侵されていたのだと思う。「歳のせいかわ力が落ちて」という母を励まし、励まし、歩くように仕向けていた月日は取り返しがつかない。

母が、体調不良を訴えて七月下旬（昭和六十年）に上京してきた。我が家へ着いたその夜半、激痛を訴えて起こされ、救急車で病院へ。診察した医師は「九十九％覚悟しておいてください。入院病棟に十日間は空気が無いので、至急何処か探したほうが……」と言う。「雪国病院へ検査入院をしてまだ三カ月ですが」と言うと「眼科医か、耳鼻咽喉科の医師しかいないのでは？」との返事。

母にはある程度のことだけを話し、母の知人が医師として勤めていた都内の病院へ入院させてもらった。手術前の様々な検査を急ぎ、一週間後に手術となった。「腸の内側には大きな腫瘍が、外側は隙間が無いほど腫瘍だらけ、他の臓器にも転移していて摘出も切除も不可能です」そのまま閉じたと告げられる。麻酔から目覚めた母に何をどう話してよいか分からず、母の手術中に御巢鷹山へ墜落した日航機事故の話ばかりしていた。飛行機事故で亡くなった人と重ね合わせて涙ぐむと、母も涙を流していた。独りで上京し、連れ合い（享年七十三。数えで）の三回忌を心配しながら、「一年遅れで盛大にやろうね」と言うわたしの言葉を信じ、五カ月間頑張つて旅立って（父と同じ享年七十三）いった。見舞いに貰った日持ちのする菓子類は、帰京の際の土産と言って枕元に置いたまま……。

頑張り屋の母であった。子どもたちが巣立った後、通信教育で点字を習得、朝日新聞の天声人語を毎日点訳、源氏物語も点訳、新聞の地方欄に載ったこともあった。点訳者になるには、スクリーニングをこなす必要があった。父と自分の分の食事の支度をして、朝五時には家を出て往路四キロ余の雪道を歩いて駅まで行く。さらにそこから列車で四時間かけて県庁所在地まで。帰宅は二十一時過ぎと言う生活を生き生きとこなしていた。納骨の際には、多くの盲人の方々が駆けつけてくださり、あらため母の人柄を見せられた思いであった。

天衣無縫の母でもあった。僅かな畑に、様々な野菜を植え、収穫のたびに「ありがとうございませう」と天に向かって叫んでいた。とうもろこしの葉ずれの音は「まもなく夏も終わりです」と告げられているようで寂しいとも言っていたが。

次女一家がイギリスに赴任中、どうしても行きたいと頼まれ、アンカレッジ経由でロンドンへ連れて行ったことがある。ヒースロー空港からの道すがら、八重の桜のトンネルを通った。四月二十九日、東京は既に葉桜の季節だった。満開の八重桜が濃ピンク色にぼつてりと咲いている。ソメイヨシノを見慣れた眼には、濃すぎる赤紫に近いピンク色が、過って世界の覇者として権勢を誇ったイギリス人の血を見るようで、ぎよつとして眼をそらしたものだ。車の中から、時折、緑の大地や緩やかな丘陵地帯が見える。「もったいないねえ。何か作物を作ればよいのに」と他国の心配をして呟いていた、貧乏性の母でもあった。

父は、私たち子どもに方言を喋らせなかった。標準語で話せと厳しく躰けられた。後から思えば寡黙な父なりの母への愛情の示し方だったのではないか。今でこそ、標準語の会話も多いが、当時日常会話のほとんどが方言の時代。慣れるまでの間、せめて家の中では子どもたちと安心して話せるようにと言う配慮ではなかったかと。

その母が、晩年、地元の人より方言を多く使いこなし、「方言保存会の会長？」と笑いあったものである。母はまた、皆で仲良くしようとはあまり付き合いの無かった人まで仲間呼び込み、それぞれが家にある物（漬物、蒸し芋からお赤飯等々）を持ち寄るお茶飲み会を、楽しんでいた。若い頃によそ者の悲哀を味わった強みだったか。「気の合わない人もいるかもしれないが、人は、それぞれの事情を抱えている」とにかく、「誰かを仲間はずれにするのはやめよう」と常に言っていたらしい。お茶飲み会は、続くかと思われたが母が亡くなると共に自然消滅。「バラバラになって寂しい」と墓参りに帰郷するたびに多くの人から、わたしがお茶に誘われもした。今では高齢者の施設が徐々にではあるが充実してきている。自然発生的な寄り合いの必要性自体、変わったのかもしれない。

一度だけ母を母の故郷、鹿見島へ連れて行ったことがある。親戚の者との会話では、鹿見島弁が出てくる。まるで外国語を聞くようであった。母が鹿見島弁を話すのを聞いた最初で最後である。「覚えていたのね」と言うと、「忘れた言葉も多いけど」

と照れていたが。あらかじめ知らせておいたわけではなかったが母の父母の墓参りをしたところ、きれいに掃除が行き届き、供えられた生花もみずみずしく、驚いたものである。母は、「もう来ることはないかもしれない」と墓石を愛撫するように両の手で撫でながら、「ありがたいねえ。遠い親戚なのに」と声を詰まらせていた。無縁仏であっても、誰に頼まれなくとも、墓地へ行ける人が近隣の分まで掃除して生花を供えると聞いて感動した。久しぶりに清しい気持ちになれたことに感謝した。当時の総理府の家計調査を見たところ、貧乏県鹿児島の切花に要する支出は日本で一番と分かり、県民性なのかと思ったことでもあった。

私の息子は、父母にとって初孫であった。四年前、萌える若葉の季節、不慮の事故でこの世を去った。享年四十三。「夜半までは持たないと思う」という医師の言葉を裏切って、意識は戻らなかったものの一週間がんばって多くの友人、知人と別れの時間を共有してから逝った。丁寧な病院側の措置もあったが、医師は、「まだ若いから生きたいという気持ちが強いのでしょうか」と言った。

息子には辛い思いばかりさせた。我慢ばかりさせた。男の子はマザコンが多いと聞いていたし、事実、周囲にマザコンが多かった。自立させたいと突き放せばかりいた。幼児期の、小学校低学年の、息子を今抱きしめてやりたい。抱きしめてやればよかった。別れがわたしに教えたことである。下の子を保育園から電車に乗せて連れ帰ると、早くても帰宅は午後六時半。下の子が骨折したときには、途中下車をしてのリハビリを三ヶ月半行ったため、帰宅が毎夜八時を過ぎた。小学年だった息子。どんなに寂しかったことだろう。お腹が空いたことだろう。二人とも小学生になると、職場から声を潜めて中華のお店に電話で出前を頼み、終電車ということもあった。ご飯の炊き方も教えた。息子は妹の面倒を見ながらであり、健気であったと遅すぎる今思う。

結婚を機に、あるいは出産を潮時としてほとんどの女性が退職していった時代である。

育児休暇も無く、保育の施設も今とは比較にならないほど少なかった。あったのは産前・産後通しての十五週間休暇だけ。保育園には入れるまでは息子を見てくれる親戚を転々とした。下の子(娘)が産まれてすぐに夫は結核で長期療養生活に入った。下の子を「保育ママさん」に預け、繰り返す途中下車、職場まで片路二時間半、

往復五時間かかる。親子共倒れを防ごうと、下の子を、保育園へ入れるまでと田舎の両親の元へ預けた。私はその負い目を引きずっていた。ことさら上の子に我慢を強いた。「ボクの妹を返して!」と、事情を理解できず電話口で泣きながら田舎の両親に叫んでいた幼い息子を思い出す。

息子は、就職と同時に布団一組と本、僅かな着替えだけを友人の車に積んで家を離れて入寮した。せめて布団一組なりとも新品をと考えていたのだが、老衰で入院していた義母の逝去、通夜、葬儀と慌しく重なり、見送ることさえ出来なかった。初月給の中から義母の位牌に一万円供えたと夫の実家から聞いた。初ボーナスでは、家族を鮭屋のカウンターに座らせてくれた。息子は耳元で、「おふくろさんは苦勞したから、今日は、好きなものを好きなだけ食べていいよ」と言った。鮭屋の主人は、「今どき珍しい」と感激してくれたうえに、「おあいそ」までサービスまでしてくれたと息子は照れ笑いをしていた。

息子は、少しずつ自力で家具・家電製品等を揃えていった。その当時であっても、「いまだき何も持たずに入寮する人も珍しい」と買い替えを考慮中だった先輩たちが幾つか家電製品を持ち込んでくれたと聞いた。「何か必要なものは?」、尋ねたときには、貰い物を含めて揃ったとの返事。寮に住んでいた間に頭金を貯め、長期のローン付きで持ち家を購入した。詳しいことはほとんど聞かなかった。一度、新居に招かれ、訪ねたときの嬉しそうな顔が忘れられない。結局、安心しきっていた私が忙しがって話らしい話もしないまま二十年が過ぎ、久しぶりに戻ってきたときは遺体。あまりにも残酷だった。罰せられた気がした。自分の重ねた罪咎を反省するより前に、神の嘲笑とさえ思った。

三回忌の納骨の日までは泣けなかった。納骨の際に始めて号泣した。顔が腫れあがった。参列してくださった方々の中には、今頃? と、啞然とした人も、うんざりした人もいるだろう。堰を切ったように涙が溢れ、声が溢れ、堪えられなかった。他人の迷惑顧みず泣いた。息子の死を乗り越えることは出来ない。だが、受け入れなくてはと頭では分かっている。それでも時々心が折れかかる。息子のことを書きとめようと始めたことであったが、息子の姿が浮かんでくるたびに、心はあっちへうろろうろ、こっちへうろろうろ。考えまいとする。当分は無理、いや一生胸に抱えて

いくことなのかもしれない。

没して息子は、わたしに様々なことを教える。死が恐くなくなり、一気に親しさを増した。死は常に生に寄り添っている。表裏一体だと身に沁みだ。今まで幾人も親しい者たちとの別れを経験してきた。書くことで乗り越えてきた。祖父の自死、母の最期は、今回はじめてふれたが、息子の死は、私にとって別次元の衝撃であったと改めて思う。これまでの経験とは比較にならない激しさでしたたかに打ちのめされ、同時に死への恐怖が取り払われた。わたしは生かされており、生きる義務がある、生き抜くだけで十分なのだ。価値があるのだ。わたしが生きて覚えている限り息子は生き続けている、ということも教えられたことの一つである。そう自分に言い聞かせながら一日、一日を積み重ねる。